

## 渡辺清の戦争体験を読む(2)

### 『戦艦武蔵の最期』(角川新書)

角川新書で『海の城』『戦艦武蔵の最期』が再版された。どちらも朝日選書版での鶴見俊輔氏の深い含蓄のある解説が採録されているが、新しく福間良明氏(前者の本)及び一ノ瀬俊也氏(後者の本)の解説が掲載されている。前号では『海の城』を紹介した。今号では『戦艦武蔵の最期』を紹介する。

戦艦武蔵はブルネイ湾を出港してまもなく、艦隊は米潜水艦の雷撃にあって、旗艦の愛宕他2艦を撃沈、大破された。その後、米軍の制空圏内に入り、激しい攻撃に会う。その後、武蔵の沈没までの姿を描く。読むのが怖く、辛くなった。大岡昇平の『レイテ戦記』が「レイテ戦の戦闘について、私が事実と判断したものを出来るだけ詳しく書く」全体小説で、一種の抽象画を連想させるとするならば、渡辺清の『戦艦武蔵の最期』は彼の同僚の最後の瞬間を「肉と血」とで描いた具象画の世界だった。ほんとうに読み進めるのが怖かった。「本書は日本海軍の戦艦武蔵が1944年10月のレイテ沖海戦で米軍機の雷爆撃を一手に引き受けるかたちで撃沈される様を、上は艦橋上部の最上部の防空指揮所で指揮を執る艦長猪口敏平少将、下は甲板で米軍機の執拗な銃爆撃にさらされる著者渡辺たちの対空機銃員や船底の汽罐室に閉じ込められてむなしく溺死していく機関兵、そして沈みゆく武蔵に置き去りにされ絶叫する負傷兵などの視点で描いている。」(「解説」一ノ瀬俊也)

読み終わって特に印象に残ったのは、19歳の海軍志願兵だった渡辺が同年兵の無残な死の瞬間を描く時、その彼らの社会的出身とその生活背景を詳細に描きこみ、その死の無念さに思いをはせていることであつた。いくつかそれを上げてみると、「堀川は福島のア武隈川沿いの農家の四男だが、彼の話によると、まとめて七反ほどの田圃や島も全部が小作で、うちの暮らしむきはひどかったようだ。(中略)これが全部うちの米だったらどんなにいいだろうと思ってね・・・やっとな秋になって米を俵に入れてもそんなわけでしょう。あとうちの食いぶちはいくらも残らないんですよ。」「彼(星野)は志願兵ならたいいてい志願する砲術学校や水雷学校の試験を一度も受けなかった。だからおれたち同年兵のなかでも無章兵は彼だけだった。学校へいけば進級が早いかわりに勤務年限がのびる。彼はそれを避けていたのである。」「おれはもう海軍にやなんの未練もないんだから、志願兵の5年の満期がきたら早くうちへ帰るんだ。みんな待っているからなあ、とくにばあさんがよ。おふくろはおれを生んだあと、肺炎カタルになって、ずいぶん寝こんでいたもんで、その間おれはばあさんの手で育てられたんだ。だからばあさんは、おれが可愛くて、志願したときも泣いて反対したっけ・・・。」「おれが武蔵に転勤になったとき、分隊の同年兵は、星野、杉本、稲葉、石巻、山口のおれと6人だった。そのうち山口は去年、休暇でくにもとに帰って自殺してしまつたが、それからおれたち5人はずっと一緒だった。(中略)だが、石巻も死んだとなれば、これで生き残ったのはおれ一人だ。(中略)みんなが死んで、自分だけがおめおめと生き残ったことに納得がいかないのだ。おれは死ぬべきであつた。死ななければいけないかつたと思う。」「死者を悼む思いとこの「生き残りの呵責と羞恥」が渡辺の戦後の生き方の基底にあつたと思う。(鶴見俊輔の解説「艦底の牡蠣殻」の分析は的確だ。)

「私はこれを書いている間も何度かいやな戦場の夢にうなされた。ある時は烈しい火焰と水柱をあび、血まみれの死体にふれ、母親を呼んでいる少年兵の金切り声をきき、ときにはひっくり返った艦底を総毛だつて駆けずりまわっている自分の姿をそこに見た。そんなとき私はきまってわき腹にじっとり寝汗をかいて眼をさまし、息をのんで床に起きなおっては、あわてて部屋のなかを見まわしたりした。『ここは艦じゃない、おれはもうとつくに陸に上がっているんだ。』と納得してみても、それからもう寝つけない。私は夜、床につくのが恐ろしかった。そしてそういう夜が幾晩もつづいた。本書はそのような鬱屈した内的葛藤の中でようやくまとめ上げたものである。」「(あとがき)」

「空母、飛行機の前には歯が立たなかつた」戦艦大和・武蔵に代表される「大艦巨砲主義」の政策の間違ひが多く、多くの将兵の犠牲を生んだ。(戦艦武蔵は艦長以下千数百名の乗員の犠牲)当時その政策を決定した政府・海軍の責任者はその失敗の責任を取らなかつた。戦後も同様に福島原発事故に代表されように同じ構造を持つたままの日本の政治が続いてきた。そのことが今も問われている。

